

わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています

今日一緒に読んだ聖書日課のみ言葉は多くの人々を戸惑わせると思います。アブラハムに対して自分の息子をいけにえとして捧げなさいという神様の要求は理解し難いですし、イエス様を心配しているペトロを叱責し、難しく大変な道に進まなければならないとおっしゃるイエス様のことも理解し難いからです。一体、これは何を意味しているのでしょうか。

まず今日の福音書に注目してみましょう。

今日の福音書の内容は、イエス様が、ご自分が苦しみを受け殺された後、3日の後に復活するのだということ、弟子たちに教えてくださるみ言葉から始まります。ところで、ペトロは、「イエス様を脇へお連れして、いさめ始めました」。なぜペトロは「いさめ始めた」のでしょうか。ペトロはイエス様をあまりにも尊敬して愛していたからでしょう。しかしもう一方では、ペトロは当時のイスラエル民らのように極めて現実的な考えを持っていたからかもしれません。当時のイスラエルの民らはメシア的な政治指導者が現れ、ヘロデとローマを退け、イスラエルを解放してくれることを待ち望んでいました。それが救いであると思っていたのです。ペトロは、イエス様は奇跡も行われる方であるから、そのような解放と救いができるであろうと思っていたでしょう。ところが、イエス様は苦しみを受け、殺されるとおっしゃるのです。ペトロとしては戸惑いも感じもしたでしょう。想像もできなかったことであり、絶望的なことです。それでペトロはイエス様を「いさめはじめた」のでしょう。

ところが、イエス様はこのようなペトロに怒りました。怒るというよりは、ペトロに「サタン、引き下がれ」とまでおっしゃいました。ちょっと酷いという感じもします。サタンは「無くなるべき悪」ではありませんか。どうして最も信頼していた弟子に「無くなるべき悪」と言えるのでしょうか。ペトロは、このような叱責を受けるほど大きな過ちをしたのでしょうか。

それだけではありません。イエス様はペトロを叱責なさった後、群衆と弟子たちと共に呼び寄せてこのようにおっしゃいました。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マルコ 8:34）

とても負担になるみ言葉です。当時イスラエルの社会で「十字架を背負う」ということは、死を意味しました。ですからイエス様は人々に「死ぬ覚悟をなさい」とおっしゃったのです。どうしてイエス様はこのように恐ろしく負担になることをおっしゃったのでしょうか。負担に思っているのは、当時の人々だけではないでしょう。イエス様を主として信じて従っている今日の私たちにとっても同じです。私たちは平和で、安心な、慰めと恵みになる人生

を期待しながら信仰生活を送っているのではないのでしょうか。ところが、イエス様は「死ぬ覚悟をして従わなければならない」とおっしゃるので、戸惑うばかりです。

ペトロの問題はイエス様のみ言葉を聞き間違えたということにあります。イエス様がおっしゃったのは、「苦しみを受け、殺される」というところにフォーカスがあるものではなく、「復活する」というところにフォーカスあるわけです。それにもかかわらずペトロは、イエス様が「苦しみを受け、殺される」ということだけ受け入れたのです。もしかしたら、ペトロは極めて現実的に考えて、苦難のない光栄な人生を期待していたかもしれません。ですから、ペトロはイエス様のみ言葉を聞き違って、復活を理解できなかったのかもしれない。

イエス様はこのようなペトロに「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と叱責なさいました。サタンという言葉の元の意味が、「混乱させる者」であると申したでしょう。イエス様の叱責は、ペトロにこのような混乱から抜けなさいという意味だったのです。つまり、苦難のない栄光はなく、死のない復活はないということ、そしてこの混乱の原因は「神のことを思わず、人間のことを思っているからである」ということを悟らせようとなさったのです。

一方、今日ご一緒に読んだ創世記のアブラハムは、徹底的に神のことを思っていた人でした。アブラハムは「独り子であるイサクを焼き尽くす捧げものとして捧げなさい」という神のみ言葉に黙々と従ったのです。しかし、多くの方々にとっては創世記のこの内容は受け入れにくいものでしょう。子どもを焼き尽くす捧げものとして捧げなさいという神様のみ言葉も分かりにくく、そのみ言葉に忠実に従うアブラハムも理解しがたいからです。もちろん、現代の倫理的な目で見ると、神様の指示もアブラハムの服従も間違いでしょう。しかし重要なのは、聖書のこの物語は「倫理的な問題」ではなく「信仰的な問題」であるということです。また創世記は、現代の観点から読むものではなく、創世記が記された約 2700 年前の状況を理解してから読まなければなりません。当時は人間を捧げるということも行われていて、子どもを独立した人格体ではなく一家の主の財産として考えている社会でした。また、子供は家長の遺産を受け継ぐものであるから家長の分身でもありました。さて、アブラハムにとってイサクは年齢 100 歳で得た独り子です。なので、神様がイサクを捧げなさいとおっしゃった出来事は、アブラハム自身と自身のすべてのものを捧げなさいという要求でもあります。

戸惑うことですが、ここには信仰者たちに問いかける根本的な問題があります。つまり、人間が自分自身を人生の主体とし、自分の運命の持ち主であると考えているのか、それとも神様が主体であり、神様が運命の持ち主なのかを尋ねていることです。私たちは、神様がこの世のすべてのものと人々をも創造なさったと告白しています。私たちは、神様のものであり、神様のみ旨に従って生きていかなければならない存在です。ですから、イサクを捧げなさいという神様の要求は、アブラハムに対する神様のみ旨に従いながら生きていくことができるかという問いでもあるのです。

アブラハムも多くの葛藤と心の煩いがあったに違いありません。けれどもアブラハムはイサクをいけにえとしてささげようと思いました。これは自分が神様のみ手によって創造されたことを認めることであり、自分のすべてのものを神様に委ねる信仰的な行為です。その時、神様はイサクの代わりに一匹の雄羊を捧げものとして用意してくださいました。これによってアブラハムはどんなに難しいことであっても神様に任せれば神様が解決してくださるということを悟りました。これがヤーウェ・イルエの信仰です。

神様はアブラハムのこのような従順、完全な信頼、自分の人生をゆだねる姿をご覧になって「子孫を天の星のように増やしてください、土地の祝福をも与える」と約束なさいました。それだけでなく、「諸国の民があなたの子孫によって祝福を得る」とおっしゃって、後代の信仰者のための祝福までしてくださいました。アブラハムの信仰によっていただいたこの祝福は、私たちにまで続くものになったのです。神様もアブラハムのこの信仰的な行いが世々に祝福すべきほどの決定的な出来事として受け入れたのです。

けれども、現実の私たちの姿を見ると、私たちは自分が自分の運命の持ち主であると思っ
て、自分の人生を神様に委ねることをためらいます。アブラハムと同じ状況に置かれたら、
きっと拒むでしょう。けれども、神様のこのような要求は、私たちを極めて愛しておられる
からなされたということ覚えなければなりません。私たちが救うためになされたのです。
私たちが神様のみ言葉にためらってしまうと、それは私たちが神様の愛と恵みから遠く離れ
ることになるのです。使徒パウロは今日一緒に読んだ「ローマ書」を通して熱い声をもっ
て私たちに向かってこのように問いかけています。

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみ
か。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」（ロマ 8 : 35）

そして神様の愛をこのように示しています。

「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒に
すべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。」（ロマ 8 : 32）

コロナ禍による長い自粛の間、多くの人々が苦しみました。疲れ果てた人々も多いでしょ
う。最近コロナの感染者がかなり減っていますし、ワクチンの接種も始まりましたので少し
ばかりほっとできるような気がします。気候もだいぶんぬくもってきて、教会の庭にある梅は
満開になり、花びらは風に舞っています。けれどもコロナが治まるにはまだまだ時間が必要
でしょう。皆さんが今日一緒に読んだローマ書のみ言葉を通して、新たに力と勇気を得ら
れますように願っております。

「これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって
輝かしい勝利を収めています。」（ロマ 8 : 37）

この一週も神様の愛の中であって平和を得られますように、神様にすべてのものをゆだね
て豊かな恵みを得られますように心からお祈りいたします。